

高田教区教化伝道く私はどこで生きているのかく 二〇二二年三月号

南無阿弥陀仏

人と生まれたことの

意味をたずねていこう

く慶讃テーマに考えるく

二〇二二年三月

高田教区教化本部長 藤島 直

「人身受け難し、いますでに受く。仏法聞き難し。いますでに聞く。この身今生に度せずんば、さらにいずれの生においてか、この身を度せん。」

(意訳)

ニンゲンに生まれながら、いつもニンゲンを失いつづけ、仏に出会いながら、常にその前を素通りしてきた私。けれども、仏に背きながらの、このいのちをおいてほかに、いったいどこに覚りへの手がかりがありえようか。

『三帰依文』・意訳・一組圓照寺前任職釈惠照

「人と生まれたことの意味をたずねる」

つい先日、「人間は、みんな、すばらしい」という法語について考える機会をいただきました。「人間なんて」と口をつけてでる方が多い私は、法語とはいえ、そんなコトバがさりと言えりような人を信頼できません。そんな人は、きつと、よほど幸福な境遇きょうぐうにいる人か、不幸に目をつむって見栄みえを張っている人にちがいないと思えるからです。さもなければ、聖人君子せいじんくんしの域いきに達した人か、相当の変わり者であるに違いありません。

裏を返せば、私の中をどうひっくり返してみても、こんな言葉は見当たらないのです。だから、個々・別々の人間すべてをひとくくりにして「みんな」なんていう人を恨み、「すばらしい」なんていう人に嫉妬しつとするのです。要するに、私は「凡夫」ぼんぶなのです。

親鸞聖人は、「凡夫というは、無明・煩惱むみょう ぼんのうわれらがみにみちみちて、欲もおおく、いかり、はらだち、そねみ、ねたむねたむころおおく、ひまなくして、臨終りんじゆうの一念にいたるまでとどまらず、きえず消『一念多念文意』』といわれます。欲いかと怒りうらと恨みと嫉妬しつとが、死ぬまで消えない凡夫こそ、まさしく私自身の本質だと、宗祖しゅうその言葉に頷うなずくのです。

しかし、同時に、凡夫だからこそ、「すばらしい」・「みんな」の一人でありたいと願うのです。「人間なんて」と嘆なげく煩惱ぼんのう具足のこの身自身が、本当の「人間」になりたいと願わせるのです。その意味で、私を動かすのは欲と恨みと怒りと嫉妬です。恨みのない人間が人間を成就しようとは思わないからです。生まれたときから満たされた人間が、人間として満たされようなんて思いません。

だからこそ、親鸞聖人が自ら「悲しきかな、愚禿ぐとく（親鸞らん）『教行信証』信巻」と、終生、我が身を嘆かれたことに、深く共感するのです。凡夫たる我が身を引き受け、愚者ぐしゃの名のりをされた宗祖しゅうそに、人間の愚かさを悲嘆ひたんしつつ生きる、本当の「人間」を見るからです。

『宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗八百年法要』が二〇二三年春に厳修されます。高田教区でも二〇二二年四月にお待ち受け大会が開催されます。「慶讃」とは「よろこびたたる」ということです。しかし、ハッピー・ベースディ的に親鸞という歴史的偉人の八五〇回のお誕生を祝う会ではないはずで、考えてみれば、親鸞聖人があきらかにされた真宗を含め、私たち浄土仏教はこの娑婆を厭おんりえどい離れ（厭離穢土）、浄土を願うこと（欣求浄土）をモットーとする宗教です。その点では、むしろ苦悩が満ち満ちているような娑婆に人間として生まれてきたこと自体を問うことこそ、それを課題として生きた宗祖を「慶讃」する意味ではないかと思うのです。